長岡地区租税教育推進協議会　会長賞　優秀

暮らしの中で生きる税金

長岡市立堤岡中学校
三年　髙橋　咲希

私の祖父母の家はすごく田舎で、旧小学校区には信号機はないし小学校も昨年廃校になってしまった。今までグラウンドから昼休みになると小学生の笑い声が聞こえていたが今では子どもの声もしなくなり静かな過疎地になってしまった。一番近いスーパーでも車で20分はかかってしまう。まさに少子高齢化で日中は後期高齢者しか道路を歩いていない。それでも、道路はきれいに舗装され川もきちんと整備されている。日本中どこにいても安全で安心した生活ができているのは税金で整備してくれているおかげだとつくづく感じる。祖父母の家の裏には川が流れる。川沿いには祖父母の家の他には家はない。しかし、いつの間にか河川工事が行われていて沿岸はコンクリートで補強されていた。都会か田舎、人口の多さではなく日本中どこにいてもそれぞれの人が等しく公共事業の恩恵を受け日常生活を送ることが出来ている。それは本当にすごいことだと思う。

また、雪国新潟県で特に税金のありがたさを痛感するのは除雪対策だ。祖父母の家は毎年何メートルも雪が積もる。雪に慣れているとはいえ、歳を取った祖父が家の前の雪を除雪するだけでもひと仕事だ。それを毎朝除雪車が来てくれて生活用の道路全てをきれいにしてくれ、また積もるとすぐに除雪車が出動してくれる。そこには必ず来てくれるという安心感がある。しかし、ドカ雪が降ってしまうと日常生活が麻痺してしまう。そうならないようにどこの道も夜明け前から除雪を進めてくれ、私達が活動し始める頃には何事もなかったかのように道がきれいになっている。

私の父はトラックドライバーで、2年前の国道8号の大雪による立ち往生の時は丸一日トラックの中に閉じ込められた。寒さと空腹、燃料の減りを感じる度に絶望的な気持ちになったそうだ。そんな時自衛隊が除雪にきてくれ、市から救援物資としてクッキーと簡易トイレを受け取りこれで帰れると希望が持てたと父は話していた。いざとなった時だからこそ本当にありがたさを感じ、希望を与えてくれるのが暮らしの中で生きる税金なんだなっと感じた。

税金は、生活をより良くするための一つ。ただ単にお金を払わなくてはいけないものと考えずに、そのお金がどこにどんなふうに使われているかどんな役割を果たしているのか考えなくてはいけない。特に災害時には、私達に希望と安心感をもたらす。今自分は困っていないからではなく、いつか誰かのために使われると考えればより良い社会が作れると思う。あたり前のことは何一つなく、「当たり前の日常」になるように税が活かされている。私達は、暮らしの中で生きる税金を正しく理解して使うことが大切だ。